

国際センター年報

第19号

平成24・25年度(2012・2013年度)

大阪教育大学国際センター

日本留学の動機調査*

—台湾からの交換留学生を例として—

城地 茂

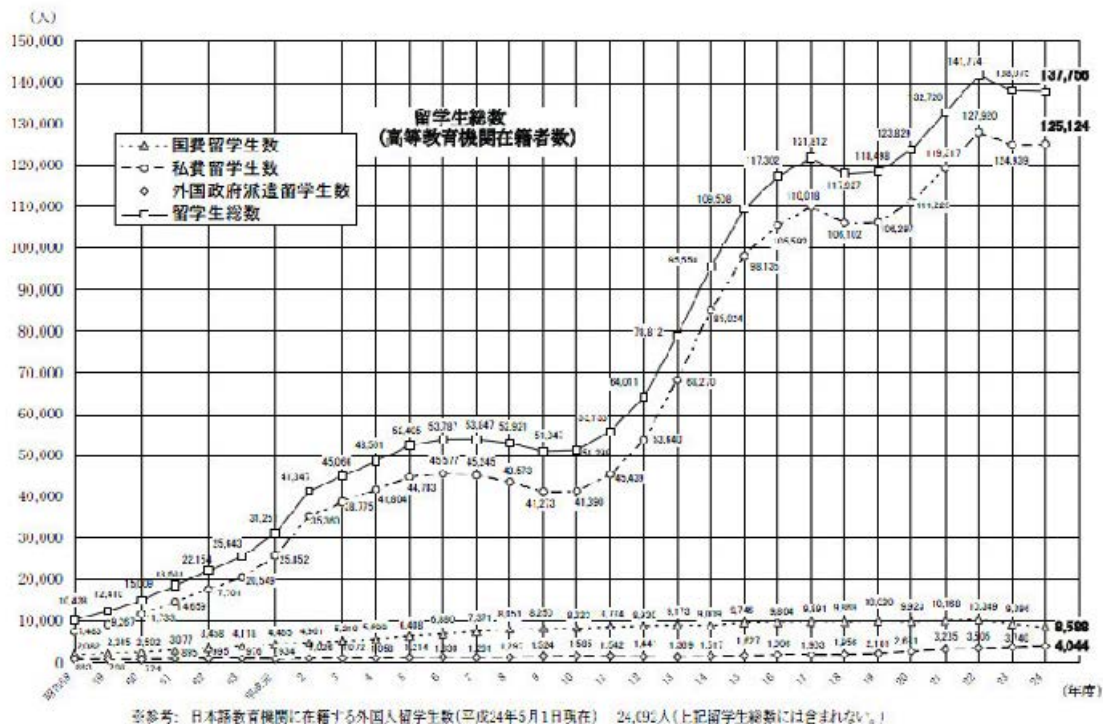
国際センター 国際事業部門

1. 諸論

1983年に中曽根康弘（1918-、首相在任 1982年11月27日-1987年11月6日）首相の提唱で「留学生10万人計画」が始められた。「教育」「友好」「国際協力」のための留学生を2000年までに10万人の受入れを目標とした¹。この目標は、3年遅れの2003年であった。1993年以降5万人程度のまま伸び悩んでいたが、2000年以降増え始めて達成した（図1参照）。

図1 留学生数の推移²（2012年5月1日現在）

留学生数の推移(各年5月1日現在)



*本稿は、科学研究費助成金「(基代)国際的な態度形成に影響を及ぼす留学 0023653266 H23.4.1~H26.3.31 (研究代表者 森田英嗣)」の助成を受けた。

¹ 当時日本は8,116人の留学生であり、アメリカが約31.2万人、フランスが約11.9万人、イギリス約5.3万人、西ドイツ約5.7万人であった（寺倉憲一（2009）「我が国における留学生受入れ政策—これまでの経緯と「留学生30万人計画」の策定—」）。

² 日本学生支援機構「各種統計、外国人留学生在籍状況」

http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data12.html

2010年7月には、2020年に30万人の留学生受入れを目指す「留学生30万人計画」骨子が策定された。2012年5月1日現在の総数は、13万7756人であり、各校の希望は20万人前後が適正人数³と考えられる。実現するためには、抜本的な改革が必要だろう。

2012年現在、留学生の上位5か国は、中国86,324人(-1,209人(-1.4%))、韓国16,651人、(-989人(-5.6%))、台湾4,617人(+46人(+1.0%))、ベトナム4,373人(+340人(+8.4%))、ネパール2,451人(+435人(+21.6%))と圧倒的にアジアからの留学生が多い。

本学においても、上位3国・地域の順位は同じで、中国90人、韓国14人、台湾9人、タイ7人、フランス3人、オーストラリア3人の順であり、留学生総数は139人である⁴。

日本に比べて台湾では留学は極めて盛んである。日本人の海外への留学生数は、2008年では、66,833人である⁵が、台湾の2012年のそれは、57,859人である⁶。人口比から考えて、5~6倍の多さと言ってよいだろう。そのうち、日本への留学生数は、6,591人、アメリカ24,818人、オーストラリア12,424人に次ぐ、非英語圏では最大の留学先である⁷。

歴史的文化的にも、地理的にも近い日本は、多くの台湾からの留学生を引き付けており、日本への留学がこのように多くなっている。

本稿では、こうした台湾の留学生のうち、交換留学生の留学動機と留学の効果をインタビューを通じて調査するものである。

2. 先行研究

留学生の調査のうち最も古いものの一つが岩男・萩原（1988）である。1975年と1985年に広範な在日留学生の実態を調査したものである。貴重な調査であるが、この調査は、2度目の調査からでも30年近く経ってしまい現在の意識と同じかどうかは疑問である。台湾では、1987年に戒厳令が解除されたが、この前後で留学に対する意識が相当異なってくるからである。また、この調査では、正規留学生を主な調査対象としており、交換留学生の在日期间が1年であることから、意識の相違を感じさせるものである。

譚・今野・渡邊（2009）では、2008年5月に中国人留学生140人に調査を行っている。その中で、「自律的留学動機づけ尺度」として、なぜ留学をしようと思ったかといった留学の動機づけを測定している。「同一化的動機づけ」は、「専門的な知識を勉強したいから」、

³ 横田雅弘（2006）『留学生交流の将来予測に関する調査研究（平成18年度文部科学省先導的
大学改革推進経費による委託研究）』（受託先一橋大学）

<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~yokotam/publications%20rp%202.html>

⁴ 『2012年大学概要』、p.6による。

⁵ 文部科学省「日本人の海外留学者数」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/12/1300642.htm

⁶ 教育部国際及兩岸教育司「2012年主要国への台湾留学生数」

<http://www.edu.tw/USERFILES/101%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E4%B8%96%E7%95%8C%E5%90%84%E4%B8%BB%E8%A6%81%E5%9C%8B%E5%AE%B6%E4%B9%8B%E6%88%91%E7%95%99%E5%AD%B8%E7%94%9F%E4%BA%BA%E6%95%B8%281%29.PDF>

⁷ 教育部国際及兩岸教育司「2012年主要国への台湾留学生数」

「自分の外国語力を上げたいから」、「自分の将来の夢をかなえるため」という留学の重要性により動機づけられているという内容、「内発的動機づけ」は、「外国で生活することが面白そうだから」、「留学というものは楽しいから」、「外国での勉強は楽しいから」といった留学そのものが楽しい理由である。「取り入乐的動機づけ」は、「外国語を喋らないと恥ずかしいから」、「外国語を覚えなければならないものだから」といった留学が十分内在化されていないまま留学をしている因子である。「外的動機づけ」には、「友人(恋人)が留学したから、私も留学したい」の4つに分類し、対人関係との適応の相関を考察している。

若生・長谷川・中山(2012)では、韓国とアメリカの帰国交換留学生を対象に、2011年8月から9月にかけてインタビューを行い、留学動機と生活に与えた影響、交友関係の構築の仕方を考察している。韓国からの留学生は、日本語専攻学生と教員養成系大学から派遣された交換留学生がいる。そのうち、日本語専攻学生には、「同一化」的理由が多く、教員養成系大学からの交換留学生は単位取得や競争意識から逃れ、「内発的」な「自己決定性の回復」を求める動機が多かった。両者とも日本語学習だけではなく、学内外の活動にも積極的に参加し、結果的に正の留学効果を導いている。アメリカからの交換留学生は、日本語力の弱者に分類されるが、チューターやホストファミリーとの関わりを評価しており、日本人の親和性を高く評価していた。

本稿では、これらの先行研究を踏まえ、台湾からの交換留学生の動機と留学の効果についてインタビューによって考察したい。

3. 台湾の教員養成系大学

台湾の教員養成は、教職課程を教員養成系大学、もしくは一般大学の教職課程を設けている学科で、その履修をした卒業生が半年の教育実習をした上で、国家試験に合格した時点で、教員免許状が授与される。さらに、県レベル(県と同じレベルの省直轄市、さらには省と同じレベルの行政院直轄市もある)の採用試験に合格して、初めて教員になることができる。

教育大学という名称は、初等教育の教員養成系大学⁸であり、2005年にそれまでの師範学院(単科大学)が学部(学院)を3つ以上を設置して改称した。一方、師範大学という名称は中等教育の教員養成系大学である。2013年4月の時点で、師範大学は3校、教育大

⁸ 台湾の高等教育は、高等教育司(局)の管轄する一般大学(と独立学院(単科大学))、技術及職業教育司の管轄する科技大学(と技術学院)、中等教育司の管轄する師範大学と教育大学になっていた。義務教育が12年になるにともない、2013年1月1日に国民教育司(小学校と中学校を担当)、中等教育司(高校と師範教育を担当)が、国民及学前教育署(義務教育と学前教育を担当する庁レベルの機関)となった。国民及学前教育署は、高級職業学校(実業高等学校)も含む高等教育以外のほとんどの学校を所轄することになった。そのため、教員養成は、師資培育及芸術教育司(局)が担当することになった。

学は5校である。

教育大学の前身は、日本統治時代の師範学校が母体となっているものが多く⁹、本学と類似した沿革を持っている。台湾総督府の地方行政区分¹⁰である州ごとに置かれ、最大時で9校¹¹あった。現在では、教育大学として独立しているのは5校である。

師範大学は、校地などで日本統治時代の学校の伝統を引き継ぐものもあるが、中華民国時代（1945年以後）に創立したものである。

国立台湾師範大学	1946年	台北市大安区和平東路一段162号	旧制台北高校跡
国立高雄師範大学	1954年	高雄市苓雅区和平一路116号	
国立彰化師範大学	1971年	彰化県彰化市進徳路1号	白沙書院、彰化青年師範学校
台北市立教育大学	1895年	台北市中正区愛国西路1号	台北第一師範学校
国立台北教育大学	1896年	台北市大安区和平東路二段134号	台北第二師範学校
国立新竹教育大学	1940年	新竹市南大路521号	新竹師範学校
国立台中教育大学	1923年	台中市西区民生路140号	台中師範学校
国立屏東教育大学	1940年	屏東県屏東市民生路4-18号	屏東師範学校

本学は、このうち、2008年2月21日に国立台北教育大学、2010年4月20日に国立高雄師範大学、2010年4月22日に国立台北教育大学、2010年5月21日に国立台湾師範大学と学術協定を結んでいる。また、学生交流も行っており、台湾からは、2008年10月より1年（例外的に半年）の交換留学プログラムを受け入れている。2013年3月末日現在、22名の受け入れをしてきた。本学からの派遣は、まだ無いが、2013年度（台湾では8月1日より開始。ただし、実際に授業が始まるのは9月中旬頃）に派遣予定である。

4. 台湾の教員養成系大学学生の一般的日本語能力

台湾では、高校で第二外国語を履修することが可能である。2012年8月現在、台湾で251校が第二外国語を開講し、そのうち、日本語が1,071クラス39,229人¹²、フランス語240

⁹ 1957年に台湾省立嘉義師範学校が設立された。嘉義県・嘉義市は、日本統治時代は、台南州（現在の雲林県も含む）であった。

¹⁰ 1920年に台北州、新竹州、台中州、台南州、高雄州、台東庁、花蓮港庁および澎湖庁（1926年高雄州より分離）の5州3庁が設置された。

¹¹ 台北市立師範学院（1895年、台北州）、国立台北師範学院（1927年、台北州）、国立新竹師範学院（1940年、新竹州）、国立台中師範学院（1923年、台中州）、国立嘉義師範学院（1957年創立）、国立台南師範学院（1899年、台南州）、国立屏東師範学院（1940年、高雄州）、国立花蓮師範学院（1947年創立）、国立台東師範学院（1948年創立）の9校であった。台北州のみは、台湾総督府台北第一師範学校（現、台北市立教育大学）と台湾総督府台北第二師範学校（現、国立台北教育大学）の2校が設置されていた。

¹² 高校生（実業高校も含む）が約77万人なので、全体の5%程度しか日本語を学習していな

クラス 7,292 人、ドイツ語 152 クラス 4,711 人、スペイン語 164 クラス 4,704 人、韓国語 74 クラス 2,214 人、ラテン語 1 クラス 43 人、ロシア語 1 クラス 38 人、イタリア語 6 クラス 202 人、ベトナム語 24 クラス 634 人、インドネシア語 1 クラス 5 人となっている¹³。

このように、日本語の学習者は圧倒的に多く、数値的には、各校で 4 クラス開講している計算になる。これは、統計的には出てこないが、筆者の経験では、基礎クラスが 3 クラス、進階クラス（初級）クラス 1 クラスが開講されていることが多いように思われる。こうした課程を履修した場合、日本語能力試験 N5 レベル程度の語学力が身につく生徒もいる。1 コマ 45 分で、週 1 回の授業である。

高校の第二外国語最大の受講者を持つ日本語でも 4 クラス平均しか開講できないため、一部の国際学校を除き常勤の日本語教師を 1 校で雇用する事は難しいのが現状である。そのせいもあってか、教員養成系大学では、英語学科（児童英語教育学科なども含む）は設置されているが、日本語関連学科、大学院は置かれていない。そのため、台湾の交換留学生は、日本語が専門ではなく、大学の第二外国語や、街中に多い日本語塾に通い、独学で日本語を学習する人が多い。大学の第二外国語で履修する場合は、1 コマ 50 分を 3 コマ、1 学期は 18 週というのが一般的である。高校で、すでに履修した場合は、初中級クラスを開講している大学もあるため、日本語能力試験 N4 レベル程度まで可能である。

数少ない例としては、学部が日本語関連学科で、卒業後、教員養成系大学の大学院に進学した院生が交換留学生として派遣される場合もある。もちろん、絶対数は少ないのだが、校内で派遣留学生選抜試験を実施すると日本語の成績が突出するため、派遣されてくるのである。通常日本語関連学科学部卒業生でも、日本語能力試験 N1 レベルに合格している例も珍しくない。大学院に合格しているのは、学部時代優秀であったわけであり、その日本語力は相当高いものである。

また、教員養成系大学も含めて、台湾では 1987 年 7 月 15 日に戒嚴令¹⁴が解除されるとそれまで制約を受けてきた台湾研究が盛んになり、台湾文化を研究する学科、大学院が増えてきた。台湾研究の史料の多くは日本語で記述されているため、こうした学科では、日本語が必修のところも少なくない。第二外国語を別途履修するだけの学生より、日頃から日本語史料を操作しているだけに、学習時間以上の語学力を有していることが多い。

5. 交換留学終了後帰国者へのインタビュー

2012 年 2 月 5 日（日）から 2 月 6 日（月）にかけて、5 名の交換留学修了者に対して台

い。

¹³ 教育部旧中等教育司統計、「歴年普通高級中学開設第二外語課程学校、班別及人数統計表」による。これは、「高級中学第二外語教育学科中心」

http://www.2ndflcenter.tw/class_detail.asp?classid=1 にも転載されている。

¹⁴ 1949 年 5 月 20 日から 1987 年 7 月 15 日まで続いた。

北市内でインタビューを行った。1対1で行い、時間は30分から1時間であった。

T1 女 大学院

T2 男 大学院

T3 女 学部3

T4 女 学部3

T5 女 学部3

の5名である。

(1) 留学の動機

台湾では、1945年まで日本語教育がなされていたため、交換留学生の祖父母の世代で日本語を話せる人も少なくない。また、日本の歌謡曲やアニメ・漫画などの日本文化に影響されたと回答する留学生が多かった。また、日本旅行でそれが強くなった。

T2さんはファミコン、T4さんは日本のアイドルグループがきっかけであった。T1さん、T5さんは日本への観光旅行がきっかけで日本文化をより知りたくなったと回答している。T3さんも、日本人と小学校高学年ごろから私的な交流を続け、それによって留学を決意したと述べているため、台湾からの留学生の多くは、「内発的動機づけ」と考えてよいだろう。これは、筆者も感じたが、2000年ごろより、それまでの就職や商売のためという理由から、日本文化への憧れという理由に変化したように感じられる。

(2) 日本語能力

台湾からの交換留学生は、派遣校内で選抜があるため、日本語能力試験旧2級合格程度以上である。また、漢字文化圏であるので、読解の能力は高い。

T1さんは大学院で、T3さんは小学校から日本語の家庭教師を付け、さらに高校の第二外国語を履修し、日本語能力試験旧2級に合格している。T4さん、T5さんは、大学で英語を学ぶために塾に通いそこで日本語を学び¹⁵、日本語能力試験旧2級に合格している。T2さんは、大学で副専攻¹⁶として日本語学科で履修し、日本語能力試験旧1級に合格していた。

¹⁵ インタビュアー注。台湾の語学学校では、英語だけではなく日本語も同時に学べる場所も少なくない。日本語を追加履修しても、わずかな追加料金で学習できることが多い。

¹⁶ 『大学法』(1948年1月12日国民政府公布、最終改定2007年01月03日修正)第28条、『大学法施行細則』(1994年8月19日行政院台83教字第32075号函核定)第25条に規定があり、それに基づき各大学で内容を定めている。通常、該当学科の必修科目のうち指定した20単位以上を履修することで、証書が発給される。

(3) 帰国後の日本留学の影響

T1さんは、日本に仕事と私的な旅行で2度来日している。日本語能力試験旧1級に合格たいと希望を語っていた。T2さんは、卒業後、IT関連企業に就職したが、日本で触れたデザイン感覚が仕事に役立っているという。また、就職の際の面接試験では、日本留学が非常に効果的であったと述べている。また、ゼミでの飲み会も、現在の仕事に役立っているという。帰国後、私的に3回日本旅行をしている。T3さんは、台湾の大学院修士課程へ進学した。博士課程への進学も考えており、その場合は、日本留学を考えているという。将来、自分の子供が留学を希望した場合、明確な目標があれば、賛成するとのことである。

T4さんは、帰国し卒業後日本へ再留学し、研究生を経て、大学院修士課程に入学している。T5さんは、帰国後、台湾で日本語専攻の大学院修士課程に進学している。

このように、日本語を活かした進路を選んでいる。学部生3名も大学院へ進学したため、交換留学生全員が大学院修了または在学となり、日本語が直接的間接的（大学院入試の語学試験）に有利に働いている。

また、全員が、SNSを利用し、日本や同時期に他国から来た留学生と連絡を保っていた。

(4) 留学に有意義だった活動

留学プログラムで、日本の文化を理解したいという目的のために役立った活動は、日本人チューターとの交流、地域住民とのふれあいを挙げている。また、同時期に寮で一緒だった他国からの交換留学生との交流は、語学習得上でも役立ったと答えている。日本人とでは、速度や言語の裏の文化背景が分からないため、会話は難しかったという。これは、筆者の留学経験でもそうであって、2年目以降だと母語話者とも会話に慣れるが、1年の交換留学では、やむを得ないものだろう。そのため、T1さんは、日本語を母語としない、留学生同士の方が、会話の練習に役立ったという。これらの留学生間では、SNSを通じて、今でも繋がりを保っていた。また、帰国後も日本との繋がりはあり、1度は仕事関係で、もう1度は、旅行で日本に来ている。また、交換留学中に知り合った日本人家族が台湾へ来たこともあったという。

T2さんは、台湾の大学寮で日本からの留学生と同室だった。自らも、台湾で留学生のチューター経験があるだけに、本学のチューターが個人の資質に依存していることに、不満を持っていた。国際経験が豊富であるが、6回日本へ来たことはあったが、日本以外へ行ったことはなかった。そのため、中国本土からの留学生との交流が新鮮だったと答えている。これらの学生とは、SNSを通じて、現在も交流している。T2さんは、日本語が上手なため、日本で役立ったのは、授業の発表だったという。

T4さんも地域住民との交流が有益だった。交換留学当時の友人とはSNSを通じて、現在も交流を続けている。日本の大学院修了後は、国際交流の仕事をしたと語っていた。

T5 さんも、交換留学中は、日本人と話すとき緊張してしまい、留学生寮の他国からの留学生との関係の方を評価している。これら他国との留学生とは、SNS を通じて、現在も関係を保っている。現在の専攻が日本語であるため、資料収集のために再来日している。大学院の受験勉強のため教員免許状の取得は断念している。

このように、日本語能力試験 N2 合格者でも 1 年間の交換留学では、日本の授業は難しく、他国からの留学生との交流が有益だったと答えた人が多かった。上級になると、日本人との授業が有益だったとしており、岩男・萩原（1988）にあるように、日本語力の低い留学生は、日本人の「親和性」を高く評価する傾向にある。

(5) インタビューのまとめ

このように、日本留学の動機は、内発的動機付けがほとんどであった。こうしたことから、日本人チューターやホストファミリーとの親和性を評価している。交友としては、チューターとの交流、ホストファミリーとの交流、寮や研修旅行を通じての留学生同士（他国からの）交流などが挙げられている。

語学力は、日本語専攻の学生でなくても日本語能力試験旧 2 級合格の能力を有し、しかも、漢字文化圏であるので、来日後の日本語力の伸展は顕著であった。

また、他国からの留学生との親和性を評価する回答も多かった。お互いに帰国後も SNS を通じて連絡を取り合っていた。しかし、これは、全員が帰国してから間もないということもあり、今後も長期間に渡って交流が続くのかどうかは不明である。また、今回の 5 名の被インタビュー者は、留学期間の時期が数年しか異ならないため、同じ正規留学生（4 年程度）との交流もあるため、個人の資質、関係に起因する部分も少なくない。そのため、留学生間の交流については、一般的なものなのか特殊な例であるのかは留意が必要である。

6. まとめ

台湾からの交換留学生は、漢字文化圏であるため、欧米からの交換留学生に比べて、日本語の語学力は高い傾向にある。来日以後の日本語力の伸展は顕著である。ところが、今回の調査対象者のほとんどは、チューターやホストファミリーとの関わりを評価している。岩男・萩原（1988）では、日本語力の低い留学生は、日本人の「親和性」を高く評価する傾向にあるとしているが、同じ台湾からの交換留学生でも日本語力の低い学生ほどその傾向があるにせよ、比較的語学力があっても、日本人との「親和性」を評価することもある。これは、日台相互の友好関係に起因するのかもしれないし、あるいは、台湾の交換留学生の動機が「日本文化に対する興味」という「内発的」な動機が多かったためなのかもしれない。

しかし、それ以上に、他国からの留学生との関わりを評価している。つまり、台湾の交

換留学生の場合、外国人との「親和性」を評価するということも示唆している。これは、比較的語学力があるということなのか、それとも内発的動機を持って留学したなのかは、調査対象が少なく判断はできない。今後の課題としたい。

留学によって、進学、就職に効果があったことが考えられ、日本語専門の学生でなくても好影響が得られたようである。今回は、本学の台湾との交換留学の歴史が短いため、その後の人生の選択やキャリアにどのような影響を与えたまでは分析できなかった。これは、今後の課題としたい。

参考文献

- 岩男寿美子・萩原滋（1988）『日本で学ぶ留学生：社会心理学的分析』勁草書房。
- 譚 紅艷・今野裕之・渡邊 勉（2009）「異文化の対人適応における動機づけの影響—中国人留学生を対象に—」『対人社会心理学研究』9:101-108.
- 横田雅弘（2006）『留学生交流の将来予測に関する調査研究（平成18年度文部科学省先導的大学改革推進経費による委託研究）』（受託先一橋大学）
<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~yokotam/publications%20rp%202.html>
- 寺倉憲一（2009）「我が国における留学生受入れ政策—これまでの経緯と「留学生30万人計画」の策定—」『レファレンス』59(2) (697):27-47.
- 若生正和・長谷川ユリ・中山あおい（2012）「日本留学の動機・体験・効果:交換留学生を中心に」『大阪教育大学紀要第IV部門』61(1):169-184.
- 城地茂（2011）「国際化とダブル・ディグリー制度—台湾を中心に」『(大阪教育大学) 国際センター年報』17:15-20.
- 城地茂（2012）「台湾における教育実習の法制と実態」『(大阪教育大学) 国際センター年報』18:8-14.